

●連日続く猛暑のなか、教会の前に咲く朝顔もすぐにしおれてしまいます。江戸時代の画家・英一蝶は「朝顔に 傘干して 行くほどぞ」と詠みました。か弱い花にそっと傘を差しかけるような、弱さをいたわる心に、イエス様のまなざしが重なります。

●本日の聖書箇所、マタイによる福音書 6 章 25 節以下は「思い悩むな」という見出しがつけられていますが、イエス様が語った「空の鳥を見なさい」「野の花を見なさい」という言葉には深い意味があります。

ルカ福音書では「空の鳥」は「カラス」と記されており、旧約聖書では忌み嫌われることの多い鳥です。「野の花」に用いられているギリシア語「クリノン」は、野アザミを指していた可能性があり、棘があり、はびこる雑草と見なされていたものでした。「今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる」との表現からも、決して立派な花ではなかったと考えられます。

しかし、イエス様はそのような「カラス」や「野アザミ」にも注目されました。自由に空を飛ぶカラス、よく見れば美しい野の花。イエス様は、罪や弱さ、貧しさを抱えながらも必死に生きる弟子たちや群衆に対して、こうした存在を見るような深いまなざしを向け、「あなたがたは価値あるものだ」と語られたのです。

●現代の私たちもまた、このイエス様のまなざしを求めています。私たちの社会は、学歴や職業、技術といった「できること」に価値を見出し、目を向けます。教会の中でさえ、無意識のうちに「役に立つ人」「できる人」が評価されてしまうことがあります。

もちろん努力や成果が尊ばれるのは良いことです。しかし、人間はそれだけで測られるべき存在ではありません。どこかで「人は、ただ生きているだけで素晴らしい」という価値観に触れなければならないのです。

●自閉症の東田直樹さんは著書『自閉症の僕が跳びはねる理由』の中で、「この世のものはすべて美しさを持っている。その美しさを自分のことのように喜ぶ」と語っています。その純粋な眼差しに触れたとき、自分は果たして、この世界にあるものの美しさを見ているだろうか、深く考えさせられます。

イエス様のまなざしもまた、そのように純粋で深いものです。たとえカラスやアザミのような存在であっても、主はその人の存在そのものの美しさと価値を見出し、愛し、労わり、「あなたは価値あるものだ」と語りかけてくださるのです。このイエス様のまなざしに触れながら、私たちもまた、世の思い煩いから解放されて生きていく者でありたいと願います。